

---

# ヴァルキリー家の娘事情

田浪亜紀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴァルキリー家の娘事情

### 【Nコード】

N4263Z

### 【作者名】

田浪亜紀

### 【あらすじ】

主人公、多田野辰巳は暑さが始まったある日、玄関先で金髪の少女、セラフィーナ「ヴァルキリー」と出会った。

その後、辰巳はセラフィにあれこれ巻き込まれイギリスに行くことに。そこでは世界を揺るがす大事件が待っていた。

## とある少年の惨劇

時は今から二十年ほど遡る。

とある少年がまだ幼い頃のことだった。

ここはイギリス某所に存在するスラム。

まだ七歳にも関わらず、少年はここで生活をしてきた。親はもう他界していた。

少年が生活している環境は決していいとは言えない。見渡すと、あちらこちらに汚水が垂れ流しにされ、無惨にも捨てられた生ゴミが異臭を放っていた。ちらほら見える人影も、元気で活発には見えない。表情は俯いていて暗い。

少年はここで孤独に生活していた。裕福 とはいいがたいが、まあなんとか明日生きるための命は繋げられていた。

そして、少年には夢があった。「絶対にここを綺麗にしてみせる」という夢が。こんな地獄みたいな場所で、純粋な気持ちを持ってもらえるのは、少年の心が綺麗だという証拠だろう。

毎日毎日必死にスラム一帯のゴミを拾っていた。食事はゴミに紛れている残り物やリンゴ。これでもまだいいほうだった。酷い日は何も見つからなかった。飲まず食わずの日が続くことさえあった。一度、汚水を口に運んでしまったことがあった。その時は生死の境目をさまようほどの高熱を発した。それでも少年は、食事ができない日があっても、ゴミ拾いは止めなかった。ここを綺麗にしたい、という気持ちだけが、少年を動かす原動力となっていた。

そして、その夢が叶うときがやってきたのだった。

ここに工場が建設されるとのことだった。最初は純粹にうれしかった。ここがただ汚いだけの、何の役にも立たずに放置されているのが嫌だった。それは少年にはとっては吉報だった。

工場の建設が始まった。希望するものは工場建設の下働きができ

た。もちろん、少年も参加した。

月給五万円。

決して多くはない額だが、今までお金さえ得られなかった彼らにとつてはまるで財宝を手を持ったかのような感覚だった。他の労働者はそれを娯楽や服、食べ物に大いに使った。だが少年は違った。生きていくために必要最低限の食にしか使わなかった。年頃の男の子がしそうな、欲しそうなものにも使わない。ただ余った分は貯めた。

しかし、この都合のいい給料の給付はそう長くは続かなかった。否、続くに続くが、それは労働者本人の体次第であった。

工場側の労働者の扱い方が劣化していったのだ。休息の時も与えず、水も与えず、ただひたすら労働。日本で考えたら労働基準法を破る働かせ方。

それが数カ月に渡って続いた。

そして少年は八歳になった。この年は普通に考えたら小学校二年生くらいだ。それでも、長きに渡って働き続けていた。死人だって出ている。その中で、八歳の少年が働いている。それはもう化け物じみていた。

だが、労働者たちも黙っていなかった。

遂にストライキが起きた。

無論、少年も参加していた。

しかし、それを工場側の人間たちは武力によって鎮圧させた。そして言った。「もう抜けられると思うなよ。私たちに逆らったら命はない。もうすでに貴様らの命は私の手の中だ」と。

このまま完成するまで働いてもらう、と付け足した。

もう自由はない。異様に、その言葉が少年を傷つけた。

では、これから何を生き甲斐にして生きていけばいいんだろう？

憂鬱だった。

死にたくもなかった。

だがそこで、ある感情が少年を支配した。

そつだ。だったらあいつら全員殺つちやえばいいんだ。こんなことを平気でやってのけるあいつらをみんな殺つちやえばいいんだ。

負の感情。それが少年の心を支配した正体。

まだ幼いうぶな少年の心を邪悪な感情が支配した。

少年は逃げ出した。

汚い道を一心不乱に走つた。

かといって、その目的は簡単に達成できるものではなかつた。当然、少年もそのことくらいは分かつていた。だからこそ、逃げ出すという選択肢を選んだのだった。

案の定、懐には日本円にして三十万円というお金が貯金として残つていた。今まで少年がコツコツと貯めてきたお金だ。

少年は逃げ切れた。

その後、少年はそのお金でありとあらゆる学問を学んだ。血眼になつて。

数年後、少年は『魔法』という領域にたどり着いた。

ある人は言った。

この世には不思議が満ち、溢れていると。

そう、この町にも不思議があった。

「行ってきまーす」

ただのたつみ  
多田野辰巳は家から飛び出した。

これといって特別な行事はないものの、なんとなくテンションマックスだった。

ニコニコとした笑顔を気持ちが悪いくらいに顔に浮かべた辰巳は、唐突に足を止めた。

「・・・・・・、は？」

理由は簡単だった。目の前に何かがあったからだだった。

突然の出来事に、呆然とする辰巳。これしか言葉が出てこなかった。玄関の前に何かがあったにならまあ仕方がないだろう。

当初、この玄関先にあるものが何かさえ分からなかった。宅配便の荷物かと思い、恐る恐る回り込みながら、観察していると、顔があった。

「えーと、・・・・・・？」

なかなか声がでない。

顔から察するに、年は十四くらいで、髪は金塊を連想させるほど綺麗な金髪。顔立ちはやや幼さを残している。格好はおかしかった。漆黒色の鎧 いや、これは甲冑と言った方がいいのだろう。少女はそれを胸、腕、腰、脚といった優先的な個所にしか服と言えるものを着てはいなかった。

もしかして、漫画とかでよく見かける異世界から落ちてきた的なシチュエーションかな？ と考えを出してみたが、それはないない、と頭の中で辰巳は振り払った。

「・・・・・・・・」

しばらく考え、頭のなかを整理していると、

「水、が・・・・・・・・欲しい」

と、少女らしき声が辰巳の耳に、入ってきた。

頭に疑問符を浮かべていると、また、声がした。

辰巳はぎこちない動きで正面に置いていた視線を、下にいる少女に向けた。

「水・・・・・・・・」

思わず一步後ずさってしまう。辰巳はなんとかその場に踏みとどまる。

「み、水か？」

尋ねると、少女は地面に寝ている首を少しだけ動かし、相槌を打った。

辰巳は大至急水を少女に渡すため、台所に向かった。持ってくる途中、辰巳の母である玲奈から質問攻めにあつたが、それをささつとかわし、その場を乗りきった。

水を持ってくると、少女は上体だけを起こし、頭を擦っていた。

「つつー」という声と共に、瞋っていた目が開かれた。目は透き通っていると思わせてしまうほど綺麗な碧眼の持ち主だった。

辰巳は可愛いな、と思いながら、手に水の入ったコップを持ちながら、少女に近づいた。

「誰だ貴様は。それと、その吐き気がする顔でじろじろ見られると、こちらとしては吐き気に見舞われるのだが？」

先程、水を求めた少年　辰巳に、少女は言った。

「悪かったな、気持ちが悪くて吐き気を催してしまう顔で」  
しかし辰巳はそれを軽くあしらった。

「なんだ、先程の少年は貴様だったのか。なんだかすまないな」

辰巳は持ってきた水を少女に渡すと、それを少女はそれを一気に飲み干した。あつという間に空になったコップを手に少女は言った。

「ご飯などもいただけると有難いんだが・・・・・・・・」

ずつずつしいやつちなあ、と辰巳は考えるも、さすがにこんな少女を見捨てるわけにもいかず、母である玲奈がいる台所へと足を運んだ。

事情を玲奈に説明すると、「それは大変、早く連れていらっしやい」と快く承諾してくれた。

外に出て、許可が出たことを言い、出てみると、「足が動かないからおんぶをしていけ」とご命令。渋々おんぶをすると、微風が吹いて、少女の金色の髪が辰巳の目の前に現れた。

(な　！？　なんだこいつ、髪からいい匂いが！)

そう思いながらも、辰巳は頭を思いつきり振り、邪念を振り払った。

たこうしているだけでは先程のことが脳裏を過ってしまうので、話題を切り出した。

「あの　」

「何だ？　くだらんことで、時間を浪費するなよ？」

酷い言われかただな、と肩を落としながらも続けた。

「重いつすね」

この時辰巳はきつとこの少女が身に付けている甲冑のことを言ったのだから、どうやら少女はそうではなかったらしい。その証拠に、顔を地平線へと沈む夕日のように真っ赤に染めていた。少女は小刻みに震えていた。

「　て悪かったな」

「・・・・・・、へ？」

「重くて悪かったなと言っているんだ！！」

「ば、バカ！　こんなトコで暴れんじゃ　　おわあああああっ！？」

ドスン、という音と共に倒れた二人。

「つつてててー」

前に倒れ、前頭部を打った辰巳は、そこを擦りながら起き上がるうと腕を支えにした。だが、立ち上がれない。疑問に思い、首だけ動かし辺りを見渡した。

そして辰巳の後ろに馬乗り状態の例の少女がいた。

少女は目を瞑ったまま頭を擦っていて、現在の状況を知っていないようだった。

少女はしばらくし、頭を擦るのをやめた。と同時に開いた目を真ん丸く見開いた。

「な………ッ、何をしているのだ貴様は!!」

言いながら、ガバツとその場から勢いよく立ち上がった。

「この」「右拳を握りしめ、「破廉恥野郎が!!」

渾身の右ストレート（漆黒色の鋼鉄製ガントレット付属）が辰巳の後頭部に炸裂した。

鈍い音が辰巳を襲った。思いのほか痛くなかったのは辰巳にとってはラッキーであった。

だがここで、痛くないと言ってしまったら面倒なことに巻き込まれそうな気がした辰巳は、瞬時に演技を開始した。その間わずかコソマ一秒。

「痛っ！ 何しやがんだ!!」

もう一度言っておこう、これは演技である。

少女は腰に備え付けていた鞘から剣を抜き出した。それを辰巳の顔に突き付ける。

グレードソード。

平均的長さは百から百八十センチメートルほどで、この剣も百センチほどの大きさだ。それでも少女との不釣り合いさは変わらない。使い方は剣というよりも、槍として使われることが多い。

それを、少女の華奢な腕で持ち上げている。

「お、おい!? 何だその剣は！ 待て不可抗力だ!! たかが人の上にのっかちまっただけだろ？ なのに」

ズササササ、と綺麗に地面にお尻を着けながら、後ろへ後退した。

「黙れ」

少女は威圧感のある声で続けた。

「戯言を申すな！ どんな理由であれ、この私に屈辱を抱かせてし

まったことを後悔するんだな」

そしてまた少し、剣先を突き付け、辰巳との距離をさらに縮めた。  
「ちよ、待てよお前。ってかお前今表情無いぞ！？ いいから落ち着けよ。まずはその剣で俺を団子四兄弟状態にすることをやめろ！」  
それでも少女は止めようとはしなかった。

「ふん。せいぜい神へでも懺悔するんだな。まあ貴様はそのようなことをしている感じには見えんが……」

「何言ってるんだよお前……、分かった！」

剣を先目の前に突き付けられて状態で、辰巳は言った。

「お前、腹減ってるからそんなに怒ってるんだろ？」

「ち、違いわ！！」

少女は突き付けていた剣を上へと掲げた。途端、その剣が微かに蒼白く輝き光始めた。

「我、汝と契約を交わし、我魂を代償として授けた。その見返りとして、汝の力を我に分け与えよ！ 魔導詠唱第二十六章『ウィル・オー・ウィスプの輝き』！」

言い終えた時だった。剣全体で光っていた光が剣先に集中し始めていき、一点に集まり 留まった。

「思い知れ！！」

辰巳は腕で顔を庇った。それに対して少女は何もすることなくそのままの構えでいた。

刹那。

剣先に留まっていた蒼白い光が一筋の光線となって辰巳に襲いかかった。

「ッ!？」

同時に、歯を食いしばった辰巳。

しかし痛みは無かった。

あるのはただ無情にも流れすぎていく時間のみ。辰巳は思いきって目を開けた。

そこには

「なぜ、なぜ当たっていない………?」

驚いている少女だけだった。

辰巳は疑問に思った。

(何が………?)

思わず辺りを見渡した。何も変わっていない。ただし、その中にただ一つだけ異常な箇所が目飛び込んできた。それはタイルが黒く焦げていた。

「ッ!？」

直感だけで十分だった。

コイツは普通じゃない。

格好だけでそう思えるものの、もっと別の意味で、辰巳はそう考えた。

「チツ、まあいい。それよりも、ご飯を貰えるか？ 先程の行為でお腹がさらに減ってしまった」

少女は掲げていた剣を鞘に戻すと、何事もなかったかのような表情になった。

辰巳は今すぐぶざけんじゃねえ、の一言くらい言いたかった。だが今そんなことを言ったとしたら命を落とし兼ねない。

つまり。

今ここではこの少女には逆らわない方がいいということを辰巳は結論付けた。

そういうことで、台所までの案内を再会することになった。少女は自力で立っていたため、そのまま案内した。

台所は玄関を入って真っ直ぐ進んだ突き当たりの部屋にあった。そこには四人がけのテーブルがあった。

どうやらもうすでに玲奈が朝食の残り物を使って調理をしていた。髪は肩甲骨辺りまで伸ばしているロングヘアで、少し黒に茶髪が混じっているといった感じの髪を持った女性だった。

「母さん、連れてきたけど」

背後にいる少女を警戒しながら、辰巳は聞いた。

「そう。じゃあ適当に腰を下ろして置いてちょうだい」

玲奈は包丁を見たままだった。

「ではお言葉に甘えて」

少女はイスに腰掛けた。辰巳もそれに習う。

さすがにこんな得体の知れない少女を玲奈と二人きりでいさせることは辰巳にはできなかった。幸運なことに、学校までは時間があつた。だから、辰巳は家に残るといふ選択肢を選んだのだった。

しばらくすると、料理を持った玲奈は大和撫子を連想させる顔立ちに、明るい笑顔を浮かべながら、辰巳たちがいるテーブルへと運んできた。それを辰巳は受け取ると、恐る恐るそれを少女の前へと差し出した。

「ごめんね、こんなものしかなくて……」

少し困った顔になった。

(いやそれはないぞ母さん。こんな得体の知れない少女に飯を出してやるだけでも十分すばらしいことだ)

辰巳がそう思っていると、少女が玲奈に礼を言った。

「いえいえ、そんあ。戴けるだけで十分です」

少女の目は少し輝いていた。

玲奈は辰巳の隣に席を取った。

「(どうしてあんなやつに疑問もなくあげられるんだよ)」

静かに、少女には聞こえないように辰巳は母である玲奈に聞いた。

少女は野菜炒めに箸を運んでいる。

玲奈は言った。

「（あら、あなたがここに連れてきたからよ。それ以外に理由なんである？）」

その返答に、辰巳は戸惑った。

確かに、連れてきたのは俺だけど、実際は無理矢理に近いような  
.....

はあ、と溜め息を吐いた。

警戒の視線を謎の少女には向けながら、辰巳は思いきって疑問をぶつけた。

「そついえば、名前は何て言うの？」

味噌汁を飲んでいた少女は唐突にその動作を中断し、

「名前か？ 名前ならコロスーゾゥヴァルキリーだが？」

その時、辰巳の脳内で危険信号を発していた。

（あれ？ 今なんか不慣れた単語を聞き取ったような。別の国ではそついう発音なのかな？）

内心汗だくの辰巳に、少女は言った。

「あ、いや失敬。すまんが先程のは間違ってしまった。正しくはセラフィーナゥヴァルキリーだ。まあ長いからセラフィとでも読んでくれれば構わない。こちらはそんなこと気にしてはいないからな」  
間違えるな！！ と辰巳はツツコミ、名前に関する疑問は消えたのであった。

しかしまだ疑問はあった。大きな疑問が。気が付けば当たり前だと思ってしまうほどの疑問が。

少女は飲みかけであった味噌汁を再び口に運んでいた。

辰巳は頭をフル回転させる 必要はなかった。そう、服装だ。

この奇想天外な服装を疑問に思わない人はいないだろう。

漆黒の甲冑を胸、腕、腰、脚といった重要な箇所のみ装備しており、そのため、肌が露出している範囲もただではすまなかった。これは誰もが疑問に思うことだろう。

「それでセラファイさん、でいいんだっけ？」

「いや、呼び捨てで構わない」

辰巳は動かしかけていた口を一旦止めた。言いにくい。それが本音だった。辰巳はこれから何でそんな格好してんだ？ と聞こうとしていたのだが、言えるわけがなかった。言える方がおかしい。無神経というやつだ。

「じゃあセラファイ」

辰巳は勇気を振り絞って、

「何でそんな格好なんだ？」

その質問に、セラファイは冷静に答えた。

「何だ？ その程度のことか。私はてつきり貴様が私を変な目で見てるその辺のいやらしいホテルにでも連れていくための口実でも言うんではないかと心配したんだが」

セラファイが言った瞬間だった。突然、玲奈の辰巳を見る目が氷のごとく冷たくなった。

「そして」

「分かった。分かったからもうやめて！ 俺が聞きたかったことはそんなちんけなものですから！！」

泣きつく辰巳。明らかに一方的にさせられている。

「そうか、ならやめてやろう」

言っと、セラファイはもうすでにすべての料理を完食していた。

「確か、この服装についてだったな」

最後に、お茶を飲み終え、ようやく辰巳の質問に着手した。

「これはその・・・別に私の趣味でこうなったわけではない。これは英国騎士団の戦闘服と言うべきものだろう。ただ、その英国騎士団の団長がこういう特殊な趣味をお持ちであって、決して私の趣味から生まれたものではない！！」

顔をリンゴのように真っ赤にさせて、セラファイは言った。

「てか、英国騎士団ってなんだ？」

辰巳の質問に、セラファイは呼吸を落ち着かせてから回答した。

「ふむ、英国騎士団というのは、主に世界のバランス　つまり平和を乱す輩を世界の裏側で暗躍する組織であって、その行動範囲は全世界に上る。そのため、世界には様々なパイプを築き上げて来た。まあ大雑把に何をしているかというところ、こんなものだ」

「裏でつて、警察みたいなもんか？　例えるなら『CIA』とか『FBI』とかそういう感じの　」

まあそんなの当たり前か、と置いていた辰巳であったが、セラフイの回答は違った。

表情を明るくし、いかにも自信ありげな表情を取った。

「ふん、そんなちつぽけな組織と一緒にされてもらっては困るな。その組織は一定の範囲内と権限しかもっていないだろう？」

（！　言っちゃったよこの子！　全世界で頑張って活動している『CIA』と『FBI』の人たちを否定した！！）

心の中で絶叫している辰巳。

しかし、そんなことも知らずに、今度は表情を少し暗くしてセラフイは語りだした。

「そこでなんだ。この頃妙な組織が現れてな。大抵のことならすぐにかたをつかせることが出来る我々の組織が苦勞している。これは前代未聞の出来事だ。私はその組織については知らない。私は下端要員だから」

妙な組織。英国騎士団という巨大な組織さえも苦勞している、という組織が現れた。そんなことを言われても、辰巳は信用できるはずがなかった。

それでも、辰巳はその真偽を探るため、言った。

「じゃあお前は、そのすげー組織を追ってここまでやって来たのか？」

「いや、そうであるのだが　」

いきなり言葉を濁らせた。構わず辰巳は続けた。

「つてことはお前がさつき玄関前に倒れていたのって……まさか！」

つまりこういうことだった。

朝何時までは定かではないが　朝かも分からない　まず、セラファイが襲われたとすると、ここ近辺ということになるだろう。さすがに襲われてからの状態で、何キロも歩くことは難しい。となる　やはり、襲撃されたのはここ近辺ということでもまず間違いはないだろう。

つまり、

まだこの近くにその組織の要員がいるかもしれないということだ。しかし、襲撃されたといっても、その当人であるセラファイにはどこにも外傷らしき傷や怪我が見当たらなかった。

「いや、確かに。襲われたとするなら貴様が思ったかもしれないことで、解釈することは可能だ。だが違う」

セラファイは辰巳の考えていたであろうことを否定し、目に光を宿した。

「私は英国騎士団から給付された今月の金をすべて使い果たし、拳銃の果て今月の食費をすべてなくしてしまったのだよッ!!」

(ようは調子こいて遊び過ぎたってことか……………)

と、辰巳が思った途端だった。

「まあそういうことだな」

辰巳は口を開いていないのに、セラファイがまるで辰巳の心を読み取ったかのような回答だった。

玲奈は「何でこの子は独り言を言ったんだろう」といった感じの表情になっていた。辰巳頭の中も疑問符でいっぱいだった。

(つーか今俺の心の中読んだ？　でも、そんなことが本当におこんのか？　もしかすると、偶然口に出してしまった言葉が俺が思ったことと重なっただけかもしれないし……………)

「それはない。確かに私は貴様の心の中を読んだ」

即答だった。

セラファイは腕を組んで、辰巳に視線を据えた。

「まあこれは私たちにとってはごくごく当たり前の技術だ。そんな

に驚くことはない」

(当たり前前ってそんな……)

思わず顔を苦くする。

「え？ ちょっとどうしたの、たっちゃん？ さっきから少し顔色が悪いわよ？」

たっちゃんとは家族内の愛称的なものだろう。そこに、嫌味度マックスの表情になったセラフィが会話に入り込んできた。

「ふん」

鼻で笑った。

嫌な奴だ、と辰巳は思った。顔を真っ赤にさせた。セラフィはそれでも追撃をやめなかった。

「良い名だな？」とニヤニヤしながら言った。

バカにすると、セラフィは席を立った。

「それでは私はこれで失礼させていただきます。おいしいご飯をありがとうございました」

玲奈に礼を言うと、出口へと向かった。の前に、セラフィはもう

一度辰巳を見て、

「たっちゃん……くッ！」

笑いやがった。

そして、今度はちゃんと出て行こうとするセラフィ。急に足を止めた。

「(いかん、ついご飯を戴いたからといって、あの情報だけは知られてはまずい)」

小声でゴニョゴニョ言っているため、辰巳たちには聞こえなかった。

「すまぬが二方に礼がしたいんで、少しおでこをこちらに出してくれませんか？」

お礼、という単語で辰巳は少しい気になって、つつい差し出してしまふ。

セラフィは近づくと、おでこに手をかざした。

刹那。

「な　ッ!？」

グラリと辰巳の体が揺らめいた。だんだん意識が薄くなっていく。

(一体何が　?)

そして、辰巳の意識は………消えた。

「……！！！」

辰巳は意識を取り戻した。

何も覚えていない。ただ平穏な風景が目の前には広がっていた。それでもなぜか辰巳の中にはモヤモヤとした違和感が残っていた。

(そういやあ学校行かなきゃ……)

そんな違和感もいず知れず、辰巳はそのことは置いて、学校へと足を運び始めた。

学校に着いた辰巳は教室に入った。

室内は生徒たちが忙しく朝のホームルームの支度をしていて騒がしかった。

辰巳は自分の席へと向かった。席は窓際にあつた。

席に着くと後ろから声がかかった。

「なあ、お前にしちゃあ珍しいな、ホームルームの直前に学校に着くなんてさあ」

声をかけてきたのは幼稚園からの付き合いがある友人の葛野だった。なんだかモテたい年頃らしく、髪型を週刊誌のイケメンモデルのようにセットしてきている。毎日それで登校してきているのだが、その効果は未だに表れない。

「ああ、そうういやあそうだな。まあこんな日もあるさ」

今は春だというのに結構な暑さに見舞われている足軽市。辰巳は暑さを隠しきれず、ネクタイを緩め、ボタンを外した。

「そうか、ならいいな」

そう言つと、葛野は机に開いていた教科書とノートに視線を落とした。まあ真面目な面もあるらしい。

話も終わり、辰巳は急いでホームルームの準備を始めた。すると「あー無理。絶対無理！ 辰巳、お前の貸してくれ」と後ろから救

援要請。

「てかお前、まだその宿題終わらしてなかったのかよ！」

訂正しよう。どうやら真面目ではなさそうだ。

「ったく、仕方ねーな。代わりにジューズ一本。それで貸してやる」  
交換条件を出して、宿題を手渡した。

「サンキュー」

まったく、と言い残し、辰巳は準備を再開した。

それにしても、まだ登校前の違和感が残っていた。自分でも分からない。それが辰巳の頭にこべりついていた。

「やっぱ分かんねーな」

独り言を言つたつもりが、後ろにいる葛野に聞こえた。

「ん？ 分かんねー問題でもあんのか？ 理科だけなら教えられるぞ。お前は中一の頃から理科だけは理解しきれてねーみてーだからな」

ニヤニヤしながら言ってくる葛野を辰巳は軽くあしらった。

「ちげーよ。ただ、なんか気になっちまってよ」

「なんだなんだ？ ついに恋愛から無縁だったお前が気になる女の子でも出来たか？ そうかそうか、お前も隅におけねーな。で、誰だ？ やっぱ委員長の暎理か？ 巨乳派なのか？ それとも」

鈍い音と共に 葛野の声が途切れた。葛野は机に蹲っていた。

「痛えなオイ！ 殴ることはねーだろ！ だいたい、そんなんだからお前はモテねーんだよ」

痛みをこらえて、葛野は言った。

余計なことを言われた辰巳は、少し頭に血が上った。

「うつせー。そんなこと言ってるお前だってどうなんだよ。なんだかこの頃週刊誌のイケメンモデルの真似してきやつてよ。それでもモテねーだろ？ それよりか昔より悪化してねーか？」

「な、なんだとおおお！？ 貴様、言っではいけないことを俺に言つたぞ！ それに、そんなことはない！ だって俺、この間女子に話しかけられたもん！ だからそんなの」

「それ、ただからかわれただけじゃないの？ どうせ『三年の葛野さんですか？ キーあれが噂の』って感じの」

「なぜ分かった！？ だけど、じゃあなんなんだよ、あの噂って」「そりゃあお前、春休み明けからその髪型だろ？ それって、春休みデビュー的なやつのは、意味じゃねーの？」

「なんだよ！ 『あの噂の』ってかっこいいからじゃないの！？」

だんだん涙目になってきている葛野。しかし辰巳はそれでも話をやめなかった。

「それに、ちよつと髪型を変えたくらいじゃモテねーつつの。まず、お前のファッションセンスについてだ。それ絶対週刊誌みて決めるだろ？」

「なんで分かったんだ？」

「なあに、簡単なことだ。」お前は春休み明けからやけにブランド物にこだわってるよな。まあその延長線上として考えたら、やっぱりいつもお前が休日着ている服が、週刊誌に載っているものだと考えてしまう。それに、お前が着ている服、なんかよくどっかで見たことあるな、と思うんだよ。そして、服がかっこよくても、服とお前が合っていない。そういうことだ」

「そんな」

さらに涙目になってきた。なんだか同情してしまう。

それでも葛野は士気を振り絞って机にうづくめた顔を上げた。

「畜生！ そんな話信じてたまるか！ この野郎！ 俺に嘘を言ってるんだな！」

葛野の表情は悔しいの臨界点を越えていた。

「なんだと！？ 本当のことを言っただけだ！ 嘘なんついてねーよ」

それに辰巳も噛みついた。

そのせいか、辰巳と葛野の顔の距離が異常に近かった。すでに鼻と鼻が触れあっている。

その時。

「おい、ホームルーム始めるぞー。皆席につけー」

ドアから入ってきたのは担任の磯部だった。顔は便りのない型を持っているが、胸部の筋肉は、ワイシャツの上からでも厚さを持っているのが視認出来てしまうくらいに分厚い。それに、上腕二頭筋も半袖になるとよく分かるのだが、小山のようにモツコリとしていた。服装はスーツ姿なのだが、その中身はすでに人造人間並みなのだ。

この磯部には、複数の恐ろしき噂があった。十五歳の時に、レスリングの日本代表に選ばれかけたとか、とある日本一の山の中で、日熊と対決して勝利したとかe t c . . . . .。このような噂があった。よく辰巳たちも生徒指導室に県内でも有数な不良を腕で吊り下げながら連合されていく姿をよく見かけるものだった。

入ってきた磯部は、やけに騒がしいところを睨み付けると、

「おい、多田野と葛野。静にせんか、もう始めるぞー」

二人は磯部がいることに気が付くと、瞬時に言い争いを止めた。

磯部は注意し終えると、名簿を教卓の上に置き、

「じゃあ今日は全校集会在朝にある。このホームルームが終わったらずぐに廊下にならんで講堂に行くように。これだけだ」

タイミングよく、委員長の暎理千智が号令を出した。長い黒髪に顔はパット見ただけ当分は忘れることが出来ないような明るい顔立ちを持っていた。なんだか告白が後を絶たなく、すべて断っているらしい。まさに難攻不落の城だった。葛野もその犠牲者の一人だった。

磯部に言われた通りホームルームの後は廊下に並び、出発した。

講堂は校舎を一回出て、連絡通路的なものを通った先にあった。

一年から三年の順に手前の方に座っていた。

常に置かれている木製のイスに腰を下ろした辰巳は、夜のうちに多少は冷やされたイスの温度に快楽を覚えた。

ここは創設以来一度も手を加えていないのが我が校の自慢じゃ、

と語っていた六十代の校長を思い出しながら、思った。

（なにが『創設以来一度も手を加えていないのが我が校の自慢じゃ』だ。壊れたらおしまいじゃねーか）

その言葉にも一理あり、この講堂の至るところにヒビが走っていた。

愚痴を言っていると、集会が始まった。

前方にある少し高めの壇上に一人の老人が登ってきた。校長だろ  
う。

だいたい、こういう集会はつまらない上に催眠術でも使っている  
んじゃないかと思わせるほどの眠気を誘う校長の話が始まる。それ  
からかつたるい校歌を歌って終わりというところだろう。ここ足輕  
中学校もそうだった。

ポーと過ごしているうちに、集会は終わった。

担当の教師が号令を出すと、みな一斉に立ち上がり礼をした。

「はあ、やっと終わったぜ。暇で仕方ねーや」

列を離れ、前にいる葛野のところへ行った辰巳に、葛野は、

「ん？ まあそうだけど、暇じゃない集会があったら是非いつてみ  
たものだよ」

「ごもつともな意見が出され、二人は微笑を浮かべた。

辰巳は授業中であるということを忘れ、窓の外にいる下校中の後  
輩たちを見下ろしていた。

辰巳たち三年は今から約一年後には受験が待っている。そのため  
か、後輩たちは十時ほどに下校が許可されたのに辰巳たちは午前  
っぱいは授業を受けるはめになっていた。

部活は今日は休みらしい。下校している生徒の数がやけに多いこ  
とから推測された。

（つたく、受験なんてなかったら俺らだって帰れたのによ。なんだ  
って午前中いっぱい勉強しなきゃなんねーんだ）

溜め息をしながら適当に授業をさぼっていた。黒板には今もなお

数式が書き込まれていた。

「ボーと過ごしていると、声がかかった。

「これ多田野。私の授業より下校中の生徒を見ているほうが楽しいか？ お前ら三年はもうすぐ受験だろう？ 集中せんか」

ベシベシ、と手に持っていた教科書を使って、声の主である数学教師である柴原が説教をしてきた。

「センサー」

立ち去っていく柴原に、辰巳は声をかけた。

「なんだ多田野」

「なんで勉強なんてあるんでしょね」

「そりゃあ社会に出たら必用だからだろう。ま、お前も大人になれば分かるさ」

質問も終わり、再び立ち去ろうとしていく柴原。

「センサー、俺はもう電車は大人料金です」

教室中が笑いで埋まった。

「あのな多田野。私が言いたかったのはだな」

「あーオツケーです。すいません」

まったく、と柴原は言い残し、授業に戻った。

その後というものの、やはり、授業には集中できなかった。それは、違和感も少なくは関わっているだろう。

その違和感が残ったまま、学校は終了した。

帰り際、葛野が「カラオケ行こうぜー」と誘ってきたものの、辰巳はそれを断り学校を後にした。

帰宅した辰巳には課題が待ち受けていた。

買い物だった。

そんなの午前中にいくらでも行く時間があったらう、と反撃した辰巳であったが、「ごめんっ、忘れてた！ 私はご飯の下ごしらえするのに時間かかるから買い出し行ってきて」と手を会わせられたので、仕方なく引き受けてしまった。

「まったく仕方ねーな」

頭を掻きながら、辰巳は気を取り戻して買い物に行くことにした。

ここ一帯にはスーパーというものがなかった。あるとしても車で約三十分。これからいくにしても往復で一時間。さらには買い物物の時間を含めたらもつとかかるだろう。代わりに、近くには商店街があった。

辰巳は買い出しの品が書かれた紙を片手に、買い物を開始した。

「えーと、人参じゃがいも、玉ねぎか。それにウコン、コエンドロ、こしょう、しょうが、唐辛子。……？ コエンドロ？ なんじゃそりゃ聞いたことねーぞ。一体何に使うのやら」

せつかく途中まで完成していた昼食のメニューが瓦解した。

「分かんだけ買えばいいか」

そう結論付けた辰巳は買い物再開した。

その時だった。視界の隅にふと、目に留まる色の髪を持った少女が目に見えた。それは、金塊を連想させる金髪を持った少女。それに、ちらつとだが、服も見えた。なんだか際どい甲冑のようなものを身に付けていた。それでも回りにいる人たちからは目を向けられていなかった。それよりか、その存在事態が存在しないかのような気もした。

辰巳はすぐにそちらを見た。始めて見るような気分はしなかった。一回どこかで会った、もしくは会話した気がした。

今までの辰巳なら可愛い、と思っただけで終わりだろう。だが今はなぜか既視感があった。足を無意識のうちに動かしていた。その、見とれてしまうくらいの美貌を備えた髪を持つ少女の元へと。

あの少女こそ、朝の違和感の謎を握る鍵だと、そう本能が叫んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4263z/>

---

ヴァルキリー家の娘事情

2011年12月17日12時46分発行